

---

# 世界に捧げるシンフォニー

空猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界に捧げるシンフォニー

### 【Nコード】

N4044M

### 【作者名】

空猫

### 【あらすじ】

幻想世界グランディには、「幻奏曲」とい高等魔法術が存在し、グランツィオーソ魔法音大にて教えられている。

そのグランツィオーソ魔法音大を舞台とする、ガチガチ論理的天才指揮者「ひつきしるべ緋月導」と、男勝りの直感的行動派落ちこぼれ奏者「そらのかなで空野奏」のドタバタファンタジー！！

## 序章 1

部屋に流れる夢想曲が、突如行進曲に変わる。その激しい旋律のギャップに、俺はビクリと肩を震わせ目を覚ました。

流れる音楽。書きかけのキャンパスノート。…状況把握。

「…俺としたことが…」

まったく。溜息も出るもんだぜ。日課の夜勉の途中で寝ちまうたあな。

書きかけのノートには、分かるやつは分かるが、大抵のやつは分からねえだろう、「アダージョ」とか「ズモルツァンド」とか「トレ・コルデ」とかの単語の羅列。簡単に説明すると、音楽用語だ。

このメモをとっている曲から考えると、三十分ほどうたた寝していらしい。

仕方ねえから、コーヒーでも淹れて一日を始めるか。と、思った矢先、携帯が着信を告げる。液晶画面には、見慣れた親友の名前。

「もしもし?」

「おはー!導<sup>しんぱん</sup>!朝早く悪い!」

「そう思っんなら、掛けてくんな。切るぞ。」

「ああっ!悪い!悪い!謝るから切らないでえっ!」

「…何か用か？」

「あのさ？今日暇？」

「…ああ、予定はないぜ？」

「今日、演奏科のテストがあるんだってよ？見に行こうぜ？」

…奏者のテストか。ちょうどパートナー居ねえから…、まあ、無駄にはならねえな。

「いいけど。…何時からだ？」

「えつとな。…八時半からスタート。」

「分かった。適当にメシ食ってから行くわ。多目的魔法堂だろ？」

「おう！待ってるぜえ！」

電話を切った後。俺はメシを調達しに、近くのコンビニへ出かけた。

穏やかな春の日差し。そりゃ、布団の魅力が増すってもんさ。

日差しのように穏やかな朝を騒ぎ立てるように、携帯の着信が鳴り響く。…んん。もっと寝かせてくれてもいいだろう？

「…もしもしい？」

「おはようございます。奏<sup>かなで</sup>さん。」

「…理<sup>りと</sup>戸？…何か用？」

「用も何も。今日は、多目的魔法堂でテストなんで…」

その言葉は張り手のように強烈で、あたしの意識は、一気に飛び起きた。

「ああああっ！！」

「っ！か、奏さん？」

「ごめん！理戸！今すぐ用意するからあっ！」

「今から！？お願いですから急いで…」

ブツツと相手の意志お構いなしに電話を切る。

ああ。昨日の部活ハードだったからなあ。九時間も寝ちゃってるしい！

…っていうか、普段がてんでダメなんだから、テストに落ちたらどうなることか…理戸にも思いつきり迷惑かけちゃってるし。ああっ！もうつっ！！

あたしは、あつと言つ間に着替えを済ませ、焼いてない食パンを、よくアニメで見るようにくわえて家を飛び出た。

## 序章 2

この多目的魔法堂は、グランツイオーソ魔法音大の所有する、主に幻奏曲のテストやコンサートにて使われる、音楽ホールだ。そのため、このホールには特別な結界が張られ、ステージで行われる幻奏曲が、その中でしか効果を発揮できないようになっている。

そして、幻奏曲のテストでは、奏者の奏でる幻奏曲の、美しさ・難易度・影響効果など様々な要素から評価される。そのテストが、今、まさに行われているわけだ。

「おお！さっすが衛まもだよなあ。」

と、感嘆してるのは、俺が認める数少ない指揮者にして親友でもある、諸橋もろはし轟とだ。端正なルックスにビジュアル系の金髪。外見だけでなく、指揮者としても一流で、しかも、奏者としての腕も確かだ。そのため、こいつに惹かれる女性は星の数ほどもいる。が、俺の知る限りで例えるなら、こいつは大型犬だ。特に彼女の前では。な。

「ああ…。紅の行進曲『麗しき炎狼の狩り』。衛らしい壮大で重厚な演奏だったな。」

「炎、つつつか、爆炎って感じだったかな。…お！次がラストだったよ。」

ステージに現れたのは、オレンジのポニーテールの女性だった。

「？…だれだ？」

「え〜っと…。…空野そらのだつてよ。」

「…知ってるか？」

「うんにゃ。」

とか言ってるうちに、演奏が始まる。…翠の嬉遊曲『青き群れ鳥の舞』。か。

「……。」

演奏が始まって十秒も経ってないが、俺は顔をしかめた。ってえのも、嬉遊曲にしては、やたら堅いは重苦しいは。音程・音量・リズム感、すべてが落第点だ。…見てみるよ。生み出された青い鳥が、地面でのたうちまわってんだぜ？

「…帰る。」

「お？」

「こんなん聞いてちゃ、耳が腐っちまうぜ。」

そう言つて、俺は最上段の扉に向かい歩き出した。

「……。」

…どうした？なんで、俺の足は止まってんだ？…あんなド下手な曲に、…何を感じてる？

「どした？導？」

「…轟。」

「ん？」

「空野…なんつうんだ？」

「…もういい。…奏くん。」

曲の途中で、俺のように顔をしかめた審査員の先公が止める。  
…  
まあ、妥当なもんだろうな。

「空野…奏。…ねえ。」

### 序章 3

多目的魔法堂に着いたのは、あたしの番のほんのちょっと前だった。

「う、ごめつ…理、戸…」

ゼツ、ゼツと肩で息をしながら、あたしは目の前のパートナーに手を合わせた。

…いや、いくら体育会系だって、道筋常時全力疾走ってのはきついつて。

「はい。…もう、合わせる時間もないですよ…」

と、渋い顔で困り果てた言葉を口に出している、黒髪セミショートストレートで幼い顔立ちの青年は、あたしの指揮者。越野理戸<sup>こしのりど</sup>。

「幻奏曲」っていうのは、指揮者と1〜複数人の奏者によって行う高等魔法術。奏者が魔力の源となり、旋律を奏で、指揮者は、その旋律の音程・音階・音量・発動背景などの調律を行う。その奏者であるあたしのパートナーが理戸ってわけ。

理戸は魔法音楽名家「越野家」の出身で、成績もすこぶる良好。そんな理戸が、なんで落ちこぼれのあたしのパートナーなのかってのは、謎なんだけどね。

「ほんと、ごめん！…でも、絶対上手くやるからさ！」

「…空野さん。」

「はい！」

まだ理戸は不安げだけど、…なんとかなるよね！

翠の嬉遊曲『青き群れ鳥の舞』。

鳥の姿の風の精が、味方に気力と力を与える、風属性の楽曲。情緒豊かに、朗々と歌うように、ね。頭では分かっているんだよね。

ステージに立ちフウと一息。演奏を始める。

「…もっとアレグロ（快速に・陽気に）。…カンタービレ（歌うように、表情豊かに）…」

始まって即座に訂正が。

「う、うん。」

「…そこはアダージョ（ゆるやかに）。…もっとアニマート（生き生きと）！」

…ああ、審査員の先生がしかめっ面してる。…って！あの、赤髪セミロング、帰ろうとしてるし！…見てろよお…

「…っ！奏さん！そこはピアノシモ（とても弱く）です！」

「え？…あ、あっ！」

「…もういい。…奏くん。」

溜息と共に一言。

えっ…。途中で？…はあ…

「…ごめん。理戸。」

「…はい。」

「あたしにしては、よく出来た方なだけどさ…」

「知ってます…」

理戸も不機嫌そう。…って、言うか、このままじゃ指揮してもらってる理戸の成績にも影響でちゃうかも…

「でも！…明日こそは、さ！絶対上手くやるから！」

「……。」

## 序章 4

「はあ…。まったく…」

嫌んなるぜ。…あ？…あの空野ってやつのことだ。あれから、あいつの演奏が気になって、まともに勉強もできねえんだから。

大体において、すべてが落第点のド下手クソが、だからな。そんなやつ気にかける俺もどうかしてるかな？

…さて、次、か。まあ、どうせテストは今日で終わりだ。一日くらい無駄にしても…。…？…なんだ？なんかざわめいてやがるが…

「…指揮者がいない!？」

…おいおい。マジかよ。

確かに、あんなやつ指揮なんかしたくはねえだろうが、だからって蹴る話があるかってんだ。その指揮者とやらも相当なヘタレだな。

「…はい。…だから、不合格でいいです。」

シンとしてっから、オレンジポニーテールの眩きはここまで届いてきやがる。

…ってか、ふざけんな。俺がわざわざ聞きに来てやってるってのに。…仕方無え。

「俺がやる。」

どよめく。　ってほどの人数はいねえが、少々のざわめきは起こる。

「あんだ、だれ？」

「ひじきめい緋月導。」

それが、俺、緋月導と空野奏の、ファーストコンタクトだった。

「さって、そろそろだね。」

睡眠はしっかりとったし、ザックリ練習もした。準備はバッチリ。さ、別室の理戸を呼びに行こうか。

「理戸？　そろそろだよ？」

コンコンとノックをして、話しかけるんだけど。　おかしいな。返事がない。眠っちゃってるのかな？　って、あたしじゃあるまいし。

取っ手をひねってみると。　なんだ。鍵かかってないじゃん。

「理戸？　……」

ドクンと鼓動がやけに大きく聞こえた。…部屋の中は真っ暗で。  
…人の気配なんてあるはずもない。

…そう、だよな。今までが、おかしかったんだ。

あたしは、無情なほどの真実を引っ提げて、ステージへ向かった。

「…指揮者がいない!?!」

「…はい。…だから、不合格でいいです。」

そうだよ。どうせ、やっても意味ないってのは…うっすら分かってたんだから。…いい機会だし、さ。今日で…

「俺がやる。」

その時は空耳かと思った。だって、都合が良すぎるだろ?…でも、はじかれるように目を向けると、それは現実で…

「…あんた、…だれ?」

歩み寄ってくるのは、昨日の赤髪セミロング。

「…緋月導。」

それが、あたし、空野奏と緋月導の、ファーストコンタクトだった。

## 第一章 1

「緋月…導？」

「ああ。…まあ、自己紹介は後回しだ。今はテストの方が先決だろ？」

「あ、ああ。…でも、合わせる時間が…」

「問題ねえ。」

そう。俺が指揮するんだ。問題なんてもんがあるはずがねえだろ？

「俺の指示する世界背景を、音で表現しろ。それで問題ねえ。…楽曲は？」

「あ、えつと、…翠の夢想曲…」

「『悪戯好きな夜風の戯れ』か。トランクィット（静かに）にアダジエット（ややゆるやかに）に始めるぞ。」

「…ああ。」

『悪戯好きな夜風の戯れ』。

気ままで気まぐれな風の精が、月の魔力に中てられ、艶やかに、悪戯に、旅人をたぶらかす様を表現した、幻覚を与える風の夢想曲。重視すべき点は、妖しく甘美な旋律と、魅力あふれる表現。

…さて、この楽曲で見極めさせてもらおうか。

フア〜っと、演奏が始まる。…って。…こいつ、なにフォルテ（強く）で入りやがる？

「おい…。トランキット（静かに）にアダジエツト（ややゆるやかに）に。つつたる。これじゃあ、突風じゃねえか。」

「あ、ああ。」

……っ！風が…

「テヌート（音を保って）！風が途切れるだろ！」

「あ、悪い。」

このやろ…。指示は聞くが、すぐに反れやがる…

「…視覚操作に向かうぞ、ピウ・モツソ（それまでより速く）で。…速すぎ！ポケ（少し）アダージョ（ゆるやかに）！」

「わ、分かってるよ…」

分かってるわけねえつつの！…こいつ、本当に音大生なのかよ…

「こつからたぶらかしにかかつぞ！アッサイ（きわめて）カプリチ  
ョーソ（気まぐれに）！」

「うん。」

「…っ！ここで気まぐれに弾かねえで、いつ弾くんだよ！」

「うう。分かってるって！」

…もう嫌だ…。なんでこんなやつを演奏を気にかけたんだ…。  
…まあ、あと数小節だ。文句は終わってからだ。

「アレグロモデラート（穏やかに速く）！」

…パンツ、という音で、濃紺の風が消えた。

…やっと終わった…。…さあ、たっつぷりと文句を言わせても  
らおうじゃないか。

## 第一章 2

「…うん。初めて組んだ割にはよく出来た方ですね。ミスはどこ  
どころありましたか？…まあ、こんなものでしょう。空野さん。合  
格です。」

「あ、ありがとうございます！」

…よく出来た方？…こんなものでしょう？……っざっけんじゃね  
ええ！！俺の指揮だぞ？そこそこの出来そこないでもトップに導く  
指揮だ！それがこんな妥協感満載な評価であっていいはずねええ！！

「ありがと！緋月くん！こんなに褒めてもらったの、あたし初めて  
かもっ」

ステージからはけた後、空野がこんなセリフを投げかける。…当  
然だが、俺の神経を逆なでするだけだ。

「…ざけんな…。」

「え？」

「っざっけんな！！いいか！？俺は、トランクイット（静かに）に  
アダジェット（ややゆるやかに）につつたはずだぞ！？なにフォ  
ルテ（強く）で始めやがる！？」

「あ、いや、ゴメンゴメン。」

「曲調についてもだ！『悪戯好きな夜風の戯れ』は、優雅さと妖艶さの行き来を、時に気ままに、時に狡猾に奏でる楽曲だ！お前は、気ままさと狡猾さのタイミングを完全にずらしてやがる！」

「えっと、…そう、だね…これからは…」

「そもそも、お前は楽曲の背景気にしてんのか！？適当に弾きやがって…」

「あの…」

「音大生ならそんなこと説明せずとも分かるだろうが！もつと真剣に音楽と向き合えってんだ！」

「……。」

「大体…っ！ぐふああ！！」

「何だ！？何が起きた！？…なぜ俺はうずくまってる！？…つつつか…マジかよ！？」

「デメっ！…空野お！！初対面の人間のみぞおちぶん殴るやつがあるかあっ！？」

「うるさい！！せっかくお礼言ってるのに、その態度は何さ！」

「お前がまともに弾かねえからだろうが！！そもそも、音大生なら…」

「だからっ……」

「あたしだって好きで音楽やってないんだよ!!」

と、叫ぶだけ叫んで、空野は去って行きやがった。……つつうか、  
恩人ぶん殴つといて、誤りもしねえで帰るやつがあるか!? なんだ  
あいつ!? 嵐か!? 台風か!? 天災なのか!? ……もう、絶対え関わ  
らねえええっ!!

## 第一章 3

「はふううう。」

休憩所にて盛大に溜息。そら、溜息も吐きたくなるわ。そんな俺に不思議そくな顔の轟。

「どうしたよ、導？朝一ブルー入ってんな？」

「おう…。溜息でも吐かねえとやってらんねえよ…」

「んん？…あ！お前が気になった、つつう空野ってやつのか！」

「ああ…。思い出すだけでやる気がそがれるぜ…」

「聞いたぜえ？…ってか、噂になってるぜ？天才指揮者、初対面の女にボディー決められる、って。」

…ニヤケやがって…俺の身にもなれつつうの。

「…もう、絶対え関わらねえ。…あんな天災女。」

「…そっぴや、空野、奏？…だっけ？…なあんか、…どっかで聞いたような…」

距離確認。… 1歩、2歩、、、歩幅を合わせて、ここぞ！

タンつと軽く音を立て空に舞い上がる…けど、…あっちゃあ、またバー落ちちゃったよ。

「お疲れです！先輩！…今日は、調子悪いですね。」

と、スポーツ飲料を渡してくれた、ヘッドバンドをした若草色のセミシヨートのこの子は、哲峰<sup>てつみね</sup>音子。陸上部であるあたしの後輩で、演奏科の一年。…でも、この子はあたしと違って音楽センスは抜群で、躍動的でバイタリティー溢れるサックスの演奏は、あたしから見ても、間違いなく本物。それでも驕ることなく、あたしに尊敬の視線を向けてくれるのには、本当に感謝している。あたしの方も、この子は大切な大切な後輩だと思うよ。

「うん。ちょっと、ね。」

「もしかして、先日のテストのことですか？きっちり合格したって聞いてますけど…」

「まあ、…合格したのは嬉しいけど…」

そう、あたしだって、良識ある20歳なんだ。癪に障ったとはいえ、さすがに初対面の、しかも、恩人でもある人に、ボディ決めたのは申し訳ないよね。一応、あたしでも、後悔はしてるんだ。…でも…

——音大生ならそんなこと説明せずとも分かるだろうが！もっと真剣に音楽と向き合えってんだ！

…ああいう、何でも出来るやつには、あたしの気持ちなんて…分  
かないよね。

「あ、先輩！お客さんですよ？」

「え？…っ！」

ペコリと下げる、黒髪セミショートストレート。…き、気まずう  
っ！

## 第一章 4

理戸と対面。話す事って…あれだよねえ…

「ねえ、理戸。なんであの時逃げたの？」

沈黙も気まずいからね。いつそ、あたしから切り込むさ。

「…不合格になるのは目に見えていました。そうになると、越野家の名を汚すことになります。」

…だと思ったよ。じゃあ…

「…じゃあ、はなからあたしなんかと組まなければよかったじゃない。なんで、あたしのパートナーになったの？」

「…奏さんのことを気に入っているからです。奏さんがどんな音楽を奏でようとどうでもいい。…でも、奏さんのパートナーを志願する人は、…ボクくらいでしょ？」

…はは。そんな風に言われると、逆に気持ちいいよね。…結局、理戸もそんなやつ、なんだね。

うつむき、自嘲加減に笑む。そうじゃないと、…泣いちゃうからさ。

「もう、いいよ。…あたし、…ここ、辞めるから。」

「！?…奏さん！」

「ほつといて！！」

ほつといてよ！…お願いだから…

ああ。眠い。昨日の夜勉強はちょっと気合入れすぎたか。

あくびをかみ殺し、食堂へ向かう。ろくに朝飯も食ってねえから、腹も極限状態だ。

「…奏さん！」

んん？…不吉な名が聞こえたぞ？

進む廊下の左に曲がった先を、窓から斜めに見る。

「ほつといて！もういいの！！」

「パートナーはボクが務めます！…他でもないボクがやるんです。問題ないじゃないですか？」

…ああ…、…そういうこと、ね。…こいつあ…ちよいとヤキ入れてやらねえとな。

「離して！」

「離しません！奏さんは、ボクのパートナーなんですから。」

「…おい。その黒キノコ。」

え？…なんで…あんたが？

「…緋月？」

「緋月…先輩…」

「なんでもめてつかは、…まあ、そこそこ見当はつく。…とりあえず、黒キノコ。オメエは現在無関係だ。とつとと消えろ。」

「？…何を言ってるんですか？ボクは、奏さんの…」

「パートナーです。…ってか？…生言ってるじゃねえぞ？」

ゾクリと血がざわめき立つ。

な、に？緋月って、こんなに怖いやつだったの？

「指揮者と奏者は2人で1つ。裏切りは許されねえし、…1人で逃げるなんざ、もってのほかだ。」

絶対零度に燃える炎みたいな、どこまでも静かに、凍り尽くすよ  
うな、怒り。

「テメエのような低能は指揮者失格だ。越野家だか何だか知らねえ  
が…目障りだ。二度と空野の前に現れんな。」

おら、いくぞ。と、緋月が腕を引く。…なんだか知らないけど…  
これって、助けてもらったのかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4044m/>

---

世界に捧げるシンフォニー

2010年10月10日18時12分発行